

平成29年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 平成29年4月19日(水)

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

(1)教科に関する調査

○調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用
の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～6学年> 国語、社会、算数、理科

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立台場小学校

【国語科】

1. 結果の概要

台場小学校では、昨年度の態度表明で次の5つの指導に重点を置くこととした。

①文法、熟語の指導②文章を要約する力の育成。③読書を通して語彙の習得

④作文指導による書く力の向上⑤スピーチ活動を通して、自分の考えをまとめる力の育成

以上の取り組みを通して、平成29年度『年度の品川区学力定着度』以下のような結果となった。

国語への関心・意欲・態度：4つの学年で目標値と同程度 1つの学年で目標値を上回っている。

話す・聞く能力：4つの学年で目標値と同程度 1つの学年で目標値を上回っている。

書く能力：3つの学年で目標値と同程度 1つの学年で目標値を上回っている。1つの学年で目標値を下回っている。

読む能力：4つの学年で目標値と同程度 1つの学年で目標値を下回っている。

言語についての知識・理解・技能：4つの学年で目標値と同程度 1つの学年で目標値を下回っている。観点別でみると、ほぼ目標値と同程度という結果となった。基礎的な問題・活用の問題の目標値と比べても、同じである。しかし、各学年とも、本調査で解決しなければならない課題が明らかとなった。

2. 具体的な課題

- ・2年生では、基礎の力はあるが活用することが苦手で、特に「読むこと」の分野に課題がある。
- ・3年生も同じく「読むこと」の分野に課題がある。
- ・4年生では、「書くこと」「話すこと・聞くこと」の分野に課題がある。
- ・5年生では言語事項に関する分野に課題がある。
- ・6年生では、「書くこと」の分野に課題がある。特に所与の条件で書くことに課題が見られた。
- ・総合的に見て台場小では、「読むこと」「書くこと」の分野に課題が多く見られた。

3. 課題の原因として考えられること

- ・2年生では、特に活用の問題でも正答率が低いことから、与えられた情報を読み取り、自分の言葉で相手に伝えることが難しい。
- ・3年生では、文章の助詞や文末の表現を正しく読み取れていない。
- ・4年生では、自分の考えを伝える際に、一定の条件を意識することが難しい。
- ・5年生では、語彙が少なく特に日常的に使用しない言葉の知識・理解・技能が不足している。
- ・6年生では、4年生と同じく自分の考えを表現する際に、一定の条件を意識することが苦手である。
- ・総合的に見て台場小では、情報を正しく受け取り相手や条件に合わせて伝えることが苦手である。

4. 課題解決のための方策

「読むこと」「書くこと」の課題を解決するために、まずは、語彙を増やす指導をしていく。そのための方策として、以下の3点を重点に指導を行っていく。

- ・3月までに、学習の中で文章の語彙や文法を確認する。
- ・朝帯学習の時間を使って、音読や視写などを行い、語彙を増やし、児童自身の言葉として定着させる。
- ・国語の授業だけでなく、各教科の学習においても、伝え方を工夫しながら、友達と自分の考えを伝え合う活動をさらに増やしていく。

5. 次年度の数値目標

国語 分類	区分	目標正答率				
		2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
基礎・活用	教科全体	83%	80%	71%	76%	75%
	基礎	87%	84%	73%	77%	79%
	活用	67%	65%	59%	68%	57%
領域	話すこと・聞くこと	75%	67%	74%	87%	71%
	書くこと	90%	78%	60%	69%	70%
	読むこと	69%	75%	72%	82%	81%
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	95%	89%	73%	73%	74%
観点	国語への関心・意欲・態度	81%	71%	68%	76%	70%
	話す・聞く能力	75%	67%	70%	87%	67%
	書く能力	84%	74%	62%	70%	70%
	読む能力	69%	70%	68%	79%	78%
	言語についての知識・理解・技能	95%	89%	72%	72%	74%

【算数科】

1. 結果の概要

台場小では、昨年度の態度表明で次の5つの指導に重点を置くこととした。

- ①算数的活動、具体的操作活動を取り入れ、自力解決の時間を確保する。
- ②様々な考え方を意識した授業を取り入れる。
- ③ともなっていく数量関係について、系統立てて学習を進める。
- ④資料の分析の方法を身に付けさせる。
- ⑤繰り返し学習し、定着を図る。
- ⑥家庭と一体となり自ら学ぶ学習習慣を身に付けさせる。

上記の態度表明に基づき、算数的活動や具体的操作活動を取り入れ、自力解決の時間を確保してきた。また、高学年では放課後や土曜日に補充学習の時間を設定し、既習内容をくり返し学習してきた。

以上の取り組みを通して、平成29年度『年度の品川区学力定着度』以下のような結果となった。

算数への関心・意欲・態度：4つの学年で目標値と同程度 1つの学年で目標値を下回っている。

数学的な考え方：3つの学年で目標値と同程度 2つの学年で目標値を下回っている。

数量や図形についての技能：5つの学年で目標値と同程度

数量や図形についての知識・理解：5つの学年で目標値と同程度

観点別で見ると、ほぼ目標値と同程度という結果となった。しかし、基礎的な問題・活用の問題の目標値と比べると、基礎的な問題については、目標値とほぼ同程度であるが、活用問題では、目標値を下回っている学年が3つあった。

2. 具体的な課題

- ・2年生では、「図形」の分野が苦手であり、基礎の力を使い活用し、記述式で回答することに課題がある。
- ・3年生では、「図形」の領域に課題があり、目標値を下回っている。
- ・4年生では、「数の相対的な大きさについての理解」、「長さの大小の比較」の基礎的な問題に課題があり、基礎の力を活用し、説明する力も伸ばしていかなければならない。
- ・5年生では、全ての観点において、目標を下回ってしまい、基礎・基本の知識・技能を再確認する必要がある。また、基礎の力を使い活用し、記述式で回答する力も伸ばしていかなければならない。
- ・6年生では、「小数のわり算」「割合」「図形の領域」に課題がある。

3. 課題の原因として考えられること

- ・2年生では、具体物を使い、考える実体験の場が少ないことが原因と考えられる。また図形の分野では、練習問題を多く解くなど、立体を平面に置き換えて考える機会が少ないことが分かった。
- ・3年生では、基礎・基本の知識・技能が十分身につけていないことが原因である。
- ・4年生では、基礎・基本の知識・技能が十分身につけていないため、数量を実物の量として考えたり、単位を揃えたりすることができていない。
- ・5年生では、基礎基本の知識・技能が十分身につけていない。
- ・6年生では、小数領域の理解が不十分であり、数量関係の理解も不十分である。
- ・総合的に見て台場小では、基礎・基本の知識・技能が十分身につけておらず、それを活用する場面に至っていないことが原因として考えられる。

4. 課題解決のための方策

- ・2年生：図形の感覚を養うために、色板や具体物を使う時間を多くとり、三角形・四角形などの特徴を掴ませる。
：3月までに、教科書の問題だけではなく、多様な学習プリントに取り組み、応用力をつけていく。
- ・3年生：3月までに、図形では、直径・半径・中心といった用語や二等辺三角形・正三角形の名称・特徴について、冬季休業の課題として、繰り返し学習することで、定着を図る。
：台場メソッドを活用し、みんなで教え合ったり、まとめたことを確認する時間をしっかり確保し、正しい知識として押さえる。
- ・4年生：通年を通して、算数の知識用語を教室掲示することで、覚えなければならぬことを身に付けさせる。
：各単元の学習を通して、具体物を操作したり、色分けを行ったり、視覚的にアプローチし、図形や数量の感覚を養う。
：説明の仕方の話型を示したり、ペアやグループで説明する場を設けたりして表現力を養う。
- ・5年生：図形では、色板などの具体物やICT機器を活用し、視覚的に捉え、図形の感覚を養う。
：3月までに、多様な学習プリントに取り組み、応用力をつけていく。
- ・6年生：3月までに、教科書の問題だけではなく、多様な学習プリントに取り組み、反復練習を行って、計算力をつける。

5. 次年度の数値目標

算数 分類	区分	目標正答率				
		2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
基礎・活用	教科全体	83%	76%	77%	72%	68%
	基礎	89%	82%	80%	76%	72%
	活用	57%	50%	64%	53%	48%
領域	数と計算	83%	84%	79%	75%	69%
	量と測定	89%	63%	75%	70%	67%
	図形	80%	69%	79%	73%	77%
観点	数量関係			72%	64%	49%
	算数への関心・意欲・態度	66%	58%	71%	62%	37%
	数学的な考え方	72%	68%	66%	63%	56%
	数量や図形についての技能	86%	80%	79%	74%	71%
	数量や図形についての知識・理解	84%	75%	77%	72%	69%

【社会科】

1. 結果の概要

台場小では、昨年度の態度表明で次の6つの指導に重点を置くこととした。

①3～6年まで基礎基本となる知識・技能を系統的・計画的に指導し、定着させる。②資料を読み取る能力の向上をさせる。③視聴覚教材を活用し、学習内容への興味関心・意識を高める。④さまざまな単元で地図を活用し、地図を読み取る力の向上を図る。⑤学習用語を使って説明する機会を大切にしていく。⑥社会科見学やゲスト・ティーチャーの活用する。以上の取り組みを通して学習を行ってきたが、平成29年度『年度の品川区学力定着度』以下のような結果となった。

社会的事象への関心・意欲・態度：1つの学年が目標値と同程度。2つの学年で目標値を下回っている。

社会的な思考・判断・表現：1つの学年が目標値と同程度。2つの学年で目標値を下回っている。

観察・資料活用の技能：3つの学年で目標値を下回っている。

社会的事象についての知識・理解：1つの学年が目標値と同程度。2つの学年で目標値を下回っている。

これまで基礎・基本となる知識・技能を確実に理解し身に付けさせるため、既習事項を繰り返し学習し、また、資料を読み取る方法を身に付けるために、資料から分かったことを活用する場面を設定してきた。しかし、今年度の調査で、全観点において、力をつけていかなければならないことが明らかとなった。

2. 具体的な課題

- ・4年生では、活用の領域が大幅に低い。その中でも、資料を読み取って表現することに課題がある。
- ・5年生では、「都の様子」や「観察・資料活用の技能」に課題がある。
- ・6年生では、基本的な知識の習得ができていないことと、資料の読み取りに課題がある。
- ・総合的に見て台場小では、資料を読み取ったり、活用したりすることに課題がある。

3. 課題の原因として考えられること

原因として考えられることは、正確な知識が身に付いていないことと、資料を読み取ったり活用したりする技術や思考する力が弱いことである。また、各学年の原因としては、以下の事が考えられる。

- ・4年生では、棒グラフの読み取り方や円グラフの読み方などの基本的な知識が身に付いていない。
- ・5年生では、調べ学習の時に、自ら資料を読み取ったり、活用したりすることに大きな個人差が見られる。
- ・6年生では、複数の資料を読み取る力が身に付いていない。

4. 課題解決のための方策

4年生までに、資料の読み取りに必要な円グラフや棒グラフなどの最低限の知識や技能を算数などの他教科と関連させながら、習得させる。

5年生までに、1つの資料だけではなく、複数の資料から何が分かるかを読み取り、表現できる力を身に付けさせる学習資料の活用をさせる。

6年生までに、これまでに学習したことを使って、進んで課題に取り組んだり、新聞を読んだりして、自分の考えをもたせ、表現させる時間を確保する。

5. 次年度の数値目標

社会 分類	目標正答率			
	区分	4年生	5年生	6年生
基礎・活用	教科全体	75%	70%	71%
	基礎	79%	73%	72%
	活用	53%	58%	64%
観点	社会的事象への関心・意欲・態度	62%	68%	68%
	社会的な思考・判断・表現	66%	68%	67%
	観察・資料活用の技能	76%	69%	72%
	社会的事象についての知識・理解	78%	71%	70%

【理科】

1. 結果の概要

台場小では、昨年度の態度表明で次の5つの指導に重点を置くこととした。

- ①身近な自然を対象として、自らの諸感覚を働かせた体験を通じて主体的に問題を見いだせるようにする。
- ②自然について興味・関心を持ち、既習の知識や技能、学び方などを活用し、科学的な見方や考え方を再構築できるようにする。
- ③自然の事物・現象を的確にとらえ、課題を明確にした観察、実験を重視した授業を展開する。
- ④学んだことを生活に生かしていくよう、理科の学習と日常生活との関連を図った内容や方法を充実できるように工夫する。
- ⑤「台場授業メソッド（問題解決学習）」を導入し、考えたり、説明したり、話し合ったりする場を設定し、問題を解決する力を身に付けさせる。

上記の、態度表明に基づき、これまで一人一人に教材を与え、全員が教材に十分触れるようにしてきた。また、方位磁針やモーターや乾電池、回路など働きを調べ、教材に十分に触れ、実験の結果、考察、まとめをノートに確実にまとめることで理解を深めることに取り組んできた。

しかし、以上の取り組みを通して学習を行ってきたが、平成29年度『年度の品川区学力定着度』以下のような結果となった。

自然事象への関心・意欲・態度：3つの学年で、目標値を下回っている。

科学的な思考・表現：1つの学年で、目標値と同程度であった。2つの目標値を下回っている。

観察・実験の技能：2つの学年で、目標値と同程度であった。1つの学年で、目標値を下回っている。

自然事象についての知識・理解：3つの学年で、目標値を下回っている。

観点別に見ると、全観点において、目標値を下回っている。また、基礎問題・活用問題ともに目標値を下回る結果となってしまった。

2. 具体的な課題

- ・4年生では、「生命・地球」（太陽と地面の様子）（光の性質）が目標値を下回り、課題が明らかとなった。
- ・5年生では、「科学的な思考・表現」、「物質・エネルギー」、「自然事象についての知識・理解」の領域で目標値を下回った。特に「科学的な思考・表現」において課題が大きくあることが明らかとなり、正答率分布が、M字型グラフ型の二極化となっていることに大きな課題がある。
- ・6年生では、「生命・地球」（植物の花の作りと実・流れる水のはたらき）、「物質・エネルギー」の領域に課題がある。
- ・総合的に見て台場小では、「科学的な思考」と「生命・地球」の領域に課題がある。

3. 課題の原因として考えられること

原因として、正確な知識が身に付いていないことと、日常生活の事象との結びつけや体験的な活動や、科学的な思考を行う学習サイクルの不足が考えられる。また、各学年で見ると、以下のことが考えられる。

- ・4年生では、観察時、押さえるべき視点・条件について押さえきれていない部分があり、考察不足になり、定着が図られなかった。
- ・5年生では、体験したり、実験したりする学習の時間が少し不足し、知識の定着が図られなかった。
- ・6年生では、実験時、各グループの数値の違いがでているが、そこで全体で整理し、考察する部分が不足し、定着が図れていない。

4. 課題解決のための方策

「科学的な思考」をつけるために、「1課題→2仮説→3実験→4考察→5まとめ→1課題」という学習サイクルの徹底を学校として3年生のうちから行っていく。

年間を通して、日常生活の事象と結び付けながら思考し、気づいたこと分かったことを表現したりする学習活動を増やしていく。

さらに、ビデオやタブレットなどの視聴覚機器を用いて、視覚的な学習を取り入れながら自然現象の理解を深めていく。

5. 次年度の数値目標

理科	目標正答率			
	区分	4年生	5年生	6年生
基礎・活用	教科全体	69%	67%	70%
	基礎	73%	72%	72%
	活用	52%	45%	65%
領域	物質・エネルギー	65%	60%	63%
	生命・地球	72%	75%	73%
観点	自然事象への関心・意欲・態度	73%	66%	77%
	科学的な考え方	62%	56%	67%
	観察・実験の技能	66%	79%	64%
	自然事象についての知識・理解	71%	70%	73%